

3. 新興技術ガバナンスワーキングチーム(官民協議会作業部会の運営)

新興技術ガバナンスワーキングチーム(以下、WT)は、フードテック分野について、官が民を規制する「技術統治」ではなく、官と民が双方向でルールを形成する「新興技術ガバナンス」の発想の下、産学官で新たなルールづくりの枠組み構築に向けたあり方を検討するものである。

令和2年度中に官民協議会会員から募集した計51名のメンバーを対象に、参加者を募り、オンライン形式にて、計3回のWT会議を開催した。3回の会議を通じて、新興技術ガバナンスに関する知見(全体像及び具体的な事例)を共有するとともに、我が国のフードテック分野における新興技術ガバナンスのあり方について、その具体化に向けた課題を含め共通認識を得ることを目指して実施した。

3.1 ワーキングチームの開催

新興技術ガバナンス WTとして、以下のとおり3回のウェブ会議を開催した。第3回 WTでは、これまでの議論の経過を踏まえ、フードテック分野における新興技術ガバナンスの在り方などに関するパネルディスカッションを行った。

第1回 新興技術ガバナンス WT	
開催期日	2021年9月29日(水)16:00~17:30
開催方法	ウェブ会議システム:ZOOM
参加者	18名(事務局含まず)
会議資料	別添 PDF
プログラム概要	<有識者講演> 東京大学 公共政策大学院 未来ビジョン研究センター兼務教員 特任准教授 松尾 真紀子 氏(新興技術ガバナンス WT メンバー)
目的	■「新興技術ガバナンス WT」の目的を明示すること ■「新興技術ガバナンス」の基本的な考え方、全体像について共有すること

第2回 新興技術ガバナンス WT	
開催期日	2021年11月26日(金)9:30~11:00
開催方法	ウェブ会議システム:ZOOM
参加者	18名(事務局含まず)
会議資料	別添 PDF
プログラム概要	<情報提供> 令和2年度フードテックの振興に係る調査委託事業 調査概要 株式会社三菱総合研究所 長田 侑子 <有識者講演> 国立研究開発法人科学技術振興機構 濱田 志穂 氏(新興技術ガバナンス WT メンバー) 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 技術戦略研究センター バイオエコノミーユニット ユニット長 水無 渉 氏(新興技術ガバナンス WT メンバー)
目的	■フードテック分野における国内外の機関の新興技術ガバナンスに係る先進的な取組事例を紹介 ■我が国が今後フードテック分野における新興技術ガバナンスに係る取組を具体的に検討し、実行していくうえで重要な論点や課題について共有すること

第3回 新興技術ガバナンス WT	
開催期日	2022年2月10日(木)14:00~16:00
開催方法	ウェブ会議システム:ZOOM
参加者	16名(事務局含まず)
会議資料・会議の概要	別添 PDF
プログラム概要	<有識者講演> Beyond Next Ventures 有馬 暁澄 氏 <パネルディスカッション> (ファシリテーター) 農林水産省 大臣官房 政策課 企画官 高梨 雄貴(事務局) (パネリスト) 東京大学 公共政策大学院 未来ビジョン研究センター兼務教員 特任准教授 松尾 真紀子 氏(新興技術ガバナンス WT メンバー) 国立研究開発法人科学技術振興機構 濱田 志穂 氏(新興技術ガバナンス WT メンバー) 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 技術戦略研究センター バイオエコノミーユニット ユニット長 水無 渉 氏(新興技術ガバナンス WT メンバー) Beyond Next Ventures 有馬 暁澄 氏 世界経済フォーラム 第四次産業革命日本センター センター長 山室 芳剛 氏 大日本印刷 技術・研究開発本部 研究開発統括室 石川 浩二 氏
目的	■第1回、第2回で取り上げた内容についてレビューする ■我が国のフードテック分野における新興技術ガバナンスのあり方、今後の取組について共有し、参加者間での共通認識を得る

3.2 パネルディスカッション概要

パネルディスカッションを通じて、フードテックにおける新興技術のガバナンスにおいて重要な観点として、以下の論点を取りまとめた。

フードテック分野における新興技術のガバナンス上重要な観点	
新興技術の価値	● 人、地域、国によって新興技術の価値は異なるため、マーケティング・ブランディング等により価値の明確化や市場への浸透が必要。 ● 価値を測る指標をステークホルダー間で議論して決めていくことが重要であり、それが投資を呼び込むことにも繋がる。

安全性・ELSI・RRIの観点での評価	● 食は身体に関わるものなので安全性は科学的エビデンスに基づく評価が必要。 ● ELSI の評価にあたっては、新興技術の実装に伴い、食だけでなく様々なものと連関したシステム全体というレベルで、様々な影響を想定し評価していく観点が重要。 ● フードテックは領域・分野を超えた問題が大きく、科学的確からしさにに関する信頼を得られる情報をどうつくるかが重要。 ● ゲノム編集や細胞培養は、フードテックだけでなく、物質生産などの他分野でも応用できる技術であり、そららの他分野と共同で議論を進めることが重要。
規制改革・ルールづくり	● 新興技術にはポテンシャルがある一方、安全性等のほか多様なリスクとのトレードオフの問題が生じることがあり、マルチステークホルダー（政策立案者、ビジネス、アカデミア、イノベーター等）が事前にトレードオフの問題をどう解決（法制化等）していくか議論することが必要。 ● 食の安全性を法規制により担保しつつも、商品の多様性、選択可能性を確保し、一定程度は消費者が選択の責任を負うという弾力性も重要。 ● 法規制だけではなく、業界としてのルールを早期に検討することが必要。 ● メリットとリスクのバランスを考慮して法規制の在り方を考えることが、ガバナンス体系を作っていく上で重要。 ● 安全性の確保が前提だが、規制を柔軟に調整するアジャイルガバナンスの観点も有用。 ● 国内と海外の議論をいかにシームレスに繋ぐかが重要。 ● 現在の食料システムの担い手である、生産者、流通、食品加工など、既存セクターとの調整や連携が必要。
支援策	● 基礎研究の段階、検証の段階、開発・実用化の段階などのステージごとに、実装を目指す技術を定めたうえで、官民が積極的に支援することが重要。 ● アグリフードテックはヘルステック等とは異なり、マーケティングに左右されるものであり、商品の魅力とあわせて生産性を向上させることが重要。そのため、これらの商業的な部分の仕組みづくりなどの支援が必要。 ● 支援策を検討するうえで、世界に展開していく技術か、国内で完結させる技術なのか、国として意志を持つことが必要。 ● 国内では新しい食品が製品化された際、消費者に口にしてもらうまでのハードルが非常に高く、食べてもらう仕組み・しかけを作る必要がある。食経験の積み重ねが社会実装の早期化につながる。

官学民の 役割	● 国は、研究者や企業と共にビジョンを描き、ロードマップ策定などビジョンを設計していくことが重要。 ● 企業は、安全に関するデータを業界団体など横の連携によって共有化することで、早期のルール形成につなげていくことが必要。ただし、安全性等の評価は企業だけではなくアカデミアや NGO も入ったコンソーシアムをつくり検討することも重要。 ● 産学官の連携も大事だが、民間の横の連携が重要。業界が手を取りあって考えていく必要。
------------	--

フードテックの振興に係る調査委託事業 実施報告書

2022 年3月

株式会社三菱総合研究所
サステナビリティ本部／経営イノベーション本部
